校長の生徒・先生応援日記 Vol.29

学びの匂い

違いを受け入れて新しい自分と出会う

日本の高校進学率は、長年、高い水準で維持されています。今から４０年以上前のことにはなりますが、中学生であった私も、高校への進学に何一つ疑問を持ちませんでした。

時は流れて平成４年、私が教員になってまだ数年しか経っていない頃のことです。私は、都心部に近い高校の夜間定時制課程に勤務を命じられました。就学年齢から還暦を超えた年配の方まで、幅広い年齢層の生徒が在籍していました。昼間、仕事に従事している勤労学生は少なくありませんでしたが、いわゆる「やんちゃ」な生徒も多く、毎日が戦場であったと記憶しています。勉強が分からなくなると、教師に向かって悪態をつく、思い通りにならないと授業をさぼって学校周辺をバイクで暴走する、教室の中ではガンを飛ばされた、メンチを切られたなど、自分の感情をストレートに相手に吐き出すため、休み時間には喧嘩が絶えませんでした。体育の授業では、チャイムと同時に「集合！」と声をかけても体育館の壁にへばりつき、私が近づこうものなら飛び掛かってくるかの勢いで、私の肩に手をまわし、「先生よぉ、そんな固いこと言わずに、今日は語ろうぜ！」と、授業をさせまいとするプレッシャーをかけてきました。おかげで私は、保健体育科の教師としてよりも、生徒が不満に思う世の中の矛盾や大人に対する憤りに反論する毎日で、気が付くと、口うるさい近所の親父の様な存在になってしまいました。

ところが不思議なことに、仲間同士の口論が絶えなかったクラスの雰囲気は、時間と共に自分と違う考えや目標を持っていることへの興味・関心からでしょうか、微妙な距離感ではあるものの、受け入れようとする態度が表れてきたのです。ある日のこと、ホームルームで女子生徒が、「私の夢は、看護師になることです。」と発言すると、髪をポマードで固めたリーゼント姿の男子生徒が「お前もすげえけど、俺はもっとすげえから！俺の夢は金持ちになることだ。」と真剣な顔つきで発言しました。周りの生徒は、必死で笑いを堪えながら拍手し、彼を称えました。

その生徒たちも４年後の卒業を迎えた時のこと、私は、「君たちにとって学校に来る意味とは何だったのか。」と尋ねました。すると、最も手を焼いた生徒が「友達でもねえし、仲良くもねえし、好きでもねえし、夢も目的も考えもちげぇし、みんな俺よりも頭がよく見えるし、自分だけ遅れているんじゃないかと思う時もあったけどよぉ、そんな連中とうまくやっていくための練習だったな。」と答えました。進路を実現させるための手段として、高校卒業の資格を取ることが学校に通う最大の理由だと思い込んでいた私にとっては、とても衝撃でした。個々の生徒の感情に振り回された４年間ではありましたが、人との出会いは、生徒だけではなく私自身を成長させてくれたことに気が付きました。この生徒の一言で心揺さぶられた私は、最後ぐらい教師らしい言葉で送り出そうとしましたが、「早く帰らせろよ、感動とか、感激とか、はなむけの言葉とかいらねえし！」と言われてしまいました。私は思わず自分の未熟さを見透かされたことに苦笑いし、いつも心の中で「この野郎！」と思うことが多かったのですが、この日ばかりは「ありがとう」と呟きました。

令和７年４月９日、多くの新入生を迎え、入学式を挙行しました。新入生にとっては、新しい仲間と出会う日となります。あらためて皆さんに期待したいことは、自分に「いいね！」と評価する友達ばかりを求めることなく、自分と異なる意見や考えを受け入れてみることです。多様な価値観を前提に切磋琢磨する日々を過ごせば、たとえ対立するようなことがあっても、新しい自分との出会いが待っていることでしょう。学校とは、将来を見据えて、物の見方や考え方を多面的に捉えることを練習する場であり、多感な時期だからこそ意味があるのです。

式では、「学習や部活動へ真摯に取り組み、成長していきたい！」と、代表生徒の元気な声が学びの匂いとなって会場に響き渡ると、若人の意欲や前向きな姿勢に感銘し、晩成する大器の可能性を感じました。

令和７年４月